時代をこえて繋がること

仲嶺　真弓

この夏は、園庭の果物の木（びわといちじく）が大豊作。昨年、木の根元の土壌改良をしたことが、見事に実を結びました。毎日、鳥が電線にとまっては色付く実を眺め狙っていました。職員もネットを張って防護対策に余念がありません。その甲斐あっって、子どもたちと一緒にもぎ取り収穫し食べることができました。来年もまた豊作であることを願いながら、これからの寒い時期の木のメンテナンスもしていきたいと思います。そして季節は少しずつ秋へ移り変わりつつあります。赤とんぼがとびかい、夕暮れ時には秋の虫の声が聞かれるようになってきました。園内の紅葉の葉先も少し色付き始めています。自然の変化を身近に感じられることに感謝しつつ、この自然をいついつまでも育んでいきたいと思います。

話は変わりますが、先日、姉妹園のアトム勤務の職員と話す機会がありました。その時、聞いた話で時代をこえて繋がることがあると感じ、嬉しく思う瞬間がありました。　私がアトムと出会ったのは 30 年前になるのですが、その時代から散歩、外遊び重視の保育内容でした。まだ無認可時代のアトムは、後数十メートル行けば泉佐野市…日根野に近い場所に位置していました。その頃の日根野周辺には、養豚業を営む方も多く、幾つかの豚舎があり、その周りは田畑が広がっていました。０・１歳児は車が行き交う道はバギーで移動し、あぜ道を歩いて散策。でこぼこのあぜ道は子どもたちが歩く練習をするには絶好の場所でした。２歳児以上の散歩は日根野に広がる森の散策や少し足をのばして日根野神社まで行くこともありました。日根野駅まで電車を見にも行きました。遊びながら季節を感じ歩いたことを今でも鮮明に覚えています。日根野駅までの道すがらにあったシャムロックという喫茶店があったのですが、クリスマスシーズンには必ず、店先の木がクリスマスツリーに様変わりしていて、そのツリーを見に行くことを目的に、ドキドキワクワクしながら歩いた冬の散歩道のこともよく思い出します。その喫茶店のマスターは髭をたくわえていたこともあり、「あれはサンタのおじさんだ。」と言い出す子どももいて、「ほんまにそうかなぁ？」と言いながら数日にわたり子どもたちと喫茶店まで散歩。店の前を通るときに、ツリーの狭間から見える喫茶店の中で働くマスターを見て心躍らせる子どもたちの姿は忘れられません。あまりに子どもたちが「あの人がサンタにちがいない。」と言い続けるので、マスターに子どもたちと話してもらえないかとお願いすると快く引き受けてくれました。「サンタではないけれどサンタは友達で、いつもツリーを見に来る子どもたちに手紙を渡してと頼まれたよ。」とお願いしたセリフをやさしく子どもたちに語りかけてくれました。サンタの友達なのだと聞いたその後も、子どもたちの空想の世界は限りなく広がっていき、クリスマスストーリーを楽しめた時代がありました。

それから何十年という時が流れ、現在、そのマスターの娘さんが、アトム保護者であることが日頃の何気ない会話からわかりました。私はその事実を職員から聞いただけでその方とは会えていないのですが、とても不思議な心持ちになりました。30 年前の保育を記憶している職員は数人しかいないけれど、そんな出来事があったことをマスターは家族に語り継ぎ、職員は職員に語り継ぎ、時代をこえて語り継がれた人同士がその話で繋がったことが何とも不思議でした。保育園の歴史の中の一握りの記憶が、数十年後にこんな形で繋がるとは…。思いもよらないサプライズでした。

つばさ共同保育園がこのつばさが丘地域に開園して 6 年目。この地域でもそんなふうに繋がっていける関係をどれだけ紡いでいけるだろうか…。数十年後、こんなふうに繋がれることがあることを夢見て、地域の方にもあたたかく子どもたちを見守ってもらえる関係を大切にしていきたいと思います。